

## 活動と成果

### <活動>

過去3年間にわたり、地政学的なリスクをテーマに開催してきたグローバルリスク・シンポジウムも、コロナウイルスの世界的な影響を受け、2020年度はオンラインでの実施となった。今回もビジネス活動に活かしていただくことを主な目的に、現時点とその後の近未来において、日本企業が対応する必要性が益々高まる海外の経済、社会、政治、地政学的リスク情報を提供した。

今年度は「ウィズ・コロナの国際秩序下でのグローバル・リスクとチャンス」をテーマに10月12日（月）、13日（火）の2日間にわたって、アジア、欧州、アフリカから同テーマにふさわしい4人の専門家がプレゼンテーションを行ったあと、聴衆を含めてのディスカッションを行った。スピーカーには次の4つのトピックを提示。

- パンデミック禍を含む危機対応における民主主義と専制政治—どちらが効率的か
- アフリカの地元伝統知識・知恵の体系化で新型コロナ禍・世界規模の重大課題に挑む
- 英国から見た米中関係とそのインプリケーション
- パンデミック禍が朝鮮半島を含む東アジア情勢に与える影響

内容としては、ビジネスがグローバルになる一方で、「ビジネス固有のリスクを超えたグローバル・リスクに感度を上げなければ良いビジネス判断ができない」との問題意識を共有し、こうした課題に対処するためにはリスクの構造を理解してその背景を知ることが大変重要であること、こうした場で産学官の専門家が得意分野を超えて経済、安全保障、地政学観点から全体を俯瞰して物事を議論し、事象を包括的に分析して理解していく場とした。

また、コロナウイルスの流行による国際社会の変化と、今後このウイルスはコントロールできるようになるのか、また当面は共存せざるを得ないと予測される中、グローバル・リスクにとっての意味は何なのか、についても問いかけた。

制約がある中でも能動的に対応するためにどうすべきかについて示唆し、今後更に増していくであろう同リスクへの対応能力向上を図った。

なお、このシンポジウムでは各スピーカーが居住する国から英語でプレゼンとディスカッションを行い、韓国語に関しては英語と、そこから日本語へとリレー通訳を行うという初の試みを行ったが、オンライン開催ならではの技術的ハードルは低くなかった。

以下はシンポジウムの要旨。

○成功する社会には3つの要素が必要。第1は「社会的結束」である。集団としてアイデンティティと目的が共有されており、共通の認識と義務の概念があれば社会の中で違いがあっても問題はない。第2の要素は「発見する能力」、行動しながら学ぶ力である。答が分からない状況で解決策を早急に見つけるためには、トップダウンではないアプローチが必要。答が分からない時は、同時並行的に実験を行うことが必要となり、そのためには社会の底辺

まで意思決定を分権化し、現場がチームとなって解決策を見出すことが必要。第3の要素は、「信頼されるリーダー」の存在である。「最高司令官」として命令を下すのではなく、「最高コミュニケーター」として共通の目的を伝えられる人物が必要。答が分からなくても失敗を恐れず実験し、学ばないといけない。トップダウン社会では、失敗を強く怖れる傾向がある。

○「民主主義」対「専制政治」の軸の中で、トップダウン体制となって状況が悪化した国がある。そこでは中央集権型体制に移行したためにコロナが増幅した。東アジアの日本、シンガポール、韓国、台湾では、新型コロナ対応で大変強固な社会的結束が見られ、リーダーへの信頼もあり、新たな共通目標を迅速に構築した一方、欧米の民主主義国家では、資本主義が広範囲で脱線した。多くの欧米諸国では社会的結束が失われ、大都市と地方との間に巨大な分断が生まれ、新たに教育格差や階級システムが生じた。今は、人々が耳を傾けるリーダー、ヒエラルキーとコミュニティーのバランスが必要。そして、リーダーは規則を作る一方で、何をすべきかの知識の大半は民衆が持っていることから適応可能なコミュニティーの構築が重要である。

○他の地域と比べ、アフリカで新型コロナウイルスのパンデミックが比較的抑えられているのはコミュニティーに根差す地元伝統知識・知恵が活用され、助け合いの精神がうまく機能しているからである。アフリカの伝統知識・知恵の体系では、文化の多様性は「資産」と捉えられている。コロナ禍の世界的課題解決には、知識体系の補完性と民主化の進展を目指す包括的かつ学際的な考えを基本とすべき。

○コロナは世界的な現象であり、生物学的な問題に留まらず、社会、経済、環境、文化、政治にも影響を及ぼしており、あらゆる知識体系や解決策への知恵を組み合わせ対応する必要がある。南アフリカには連帯、価値観の共有、協働、資源を無駄なく最小限に使いながら共通の敵にあたる、という理念がある。

○世界のどの地域にも文化や言語に独自の多様性があると認識して地元伝統知識を様々な課題解決のために活用していくことが有用である。地元伝統知識を基礎に、他の知識体系との補完性を高めていくことが資産の創造となる。多様性が資産だと見なすことで人類には恩恵がもたらされ、世界的な課題解決にも活かしていくことができるようになる。

○コロナの流行がもたらす長期的変化を解明するのは時期尚早だが、過去に起きた諸現象を加速させる媒介的な役割を果たしていることには確信を持っている。米中関係は戦略的な協調関係から戦略的競争へと移行。中国の台頭を米国が自らの覇権への挑戦と見なして以降、競争関係は貿易、金融、技術等多くの分野に及び、武力紛争にも発展しかねない潜在リスクを孕んでいる。米国が特に懸念を抱くのは、中国側が技術面で高い野心を見せ、北京政府が世界のインターネットのリエンジニアリングを試み、ゲートウェイ技術である5Gモバイル技術の標準を設定しようと、先進技術分野の量子コンピューティング、量子暗号、バイオテクノロジー等に多額の投資を行っているからである。国力の繁栄に最も重要な電気通信ネットワークが中国に密接に関わり、中国の一方体制に支配され得る企業に抑えられてはならないという考えである。

○ウイルスの流行は、こうした緊張関係の対立をより鮮明にした。知的財産を基に成立して

いる技術を中国に販売する企業に、米国は事実上の対中販売禁止の政策をとった。グローバル・サプライチェーンの効率は良いが、一部市場にのみ依存した脆弱性を浮き彫りにした。パンデミック発生前から製造拠点の一部を移転し、回復できる力を高めるデカップリングの動きが出ていたが、米中二カ国は技術的にあまりにも緊密な関係にあり、完全に切り離すことは想像しにくい。ただし、方向性として世界が二分され、どちらかを選ぶ必要性に迫られた結果のコストは非常に高く、見えないコストは更に高い。中国はハイテク研究開発でも投資の成果を出し始め、真の意味でイノベーションを生む可能性も非常に高い。

○技術的なデカップリングが生じた場合、米国型を採用する国々、中国型を採用する国々という二分化が生じる可能性がある。間に挟まれた国々はシステムの互換性の問題から追加コストをかけて両方の技術を運用せざるを得ない状況に置かれるかもしれない。地政学的なトレンドとして、西から東へとパワーシフトが起こる中、米国はグローバル覇権国としての役割を果たし続ける意欲を失いつつも役割を完全に手放してはおらず、中国もそのような役割を引き継ぐ準備がまだ出来ていない。米国が覇権国としての役割を果たし続けたとしても、同盟国は技術分野も含めて自国の安全保障のためにより多くの責任を果たすことを学ばなければならない。そして、あらゆる場面において大国間の政治の駆け引きに適応することが必要となる。

○世界は不確実性に満ちており、我々が直面する課題には答が分からない中でも現実的な判断を下し、証拠に基づいて判断していくことが求められる。確信、熱狂、イデオロギーというものは役に立たない。全ての国々がこの状況に適応することを学び、不確実な状況に慣れ、政府はこれが現実であることを国民の前で正直に認めていかなければならない。

○コロナ・ワクチンや治療薬の開発以降も、ITやAI等の活用を含む非対面化やグローバル・バリュー・チェーンの変化により世界市場から地域市場への分散が促進され、中央政府機能の強化がトレンドとして定着すると予測される。

○パンデミック以前の北朝鮮は、2012年の金正恩政権発足以来、事実上対外関係を断絶して核兵器開発に注力し、2017年に核兵器完成宣言を発した直後に韓国及び米国との関係改善を表明し始めたが、内部的にはその間に「改革」「開放」の2つの変革が行われていた。

○改革は社会主義企業責任制と呼ばれ、国家から共同体的な組織・機関等に所有権を移行。開放は4つの中央経済特区と23の地方経済開発区を指定し、外資誘致特別ゾーンを作るといったものだったが、2019年の米朝首脳会談におけるノー・ディールにより新たに自力更生路線に転換、対米・韓関係を断絶し、対中・露関係を強化した。また、北朝鮮が保持している核兵器の高度化も宣言した。

○コロナ以降の北朝鮮は国境を全面閉鎖し、群衆動員イベントも自粛、マスク着用義務化等の感染防止対策を取っている。そしてパンデミックを利用し住民の不満を自力更生モードに転換させ、加速化させている。先の5か年戦略の失敗を認め、2021年からは新たに経済開発5か年計画を推進する宣言も行った。これにより、自力更生モードへの転換・グローバル化よりも地域化、国家中心主義に向かうかもしれない。

○韓国文政権は北朝鮮との共同貿易や小規模交易の実施等を提案し、終戦宣言の糸口を模索している。しかし、北朝鮮側はコロナ対応で完全遮断しており、和解の動きは鈍化。

○近現代史を振り返ると、15世紀以前は中国中心の世界だったが、それ以降に大航海時代は西洋中心の国際社会へと変化、20世紀には、第二次世界大戦と冷戦を経て米国中心の世界へ転換した。しかし現在、再び中国が市場開放、技術革新による経済的成果で台頭し始め、太平洋進出して大陸と海洋への拡張を諮って米国と衝突し始めた。

○パンデミック以降、各国は独自に自力更生を目指し、国家主義的或いは全体主義的なアプローチに向かいかねない。これらの国家間で連帯が進み、中東地域、欧州へと繋がると、東アジア地域での米中衝突が「地政学的な東西の新冷戦」の様相へと展開し、「トゥキディデスの罠」にはまるリスクがある。パンデミック禍は更に米中間の覇権争いを加速させかねないが、そのような衝突を相互に防止し、摩擦を最小限にさせるミドル・パワーが仲介者的な役割を發揮することができるのではないか。

## <成果>

50名以上の参加者と多くのコメントから関心の高さが窺えたが、オンライン開催故に成果把握は容易ではなかった。他の事業同様、来年度以降の課題としてアンケート収集方法について精査していきたい。

全体の満足度としては、91%が満足、期待度も86%が高いとの結果が出た。各スピーカーのプレゼンテーションは多少のバラつきはあったものの、63%~91%が満足であった。また、86%の参加者が業務・研究の参考になったと回答した。

聴衆の感想は、以下のとおり普段聞けない内容で貴重だったとの意見が多く寄せられた。

- ・内容が濃く特に最後のQ&Aの部分が非常におもしろかった。
- ・とても興味深い内容であり、現在のコロナ禍をどのように生き延びるかを考える良い機会になった。
- ・パンデミック禍を生き抜く条件等、社会生活での指針となる内容を聞き、大きな財産となった。
- ・国境を越えて自宅から参加でき、デジタル技術の素晴らしさを実感した。
- ・同時通訳もあり、内容が理解できた。色々な見方があることを再発見。
- ・三カ国語の同時通訳には難しさもあるため、英語に統一するのも一案。
- ・コロナ禍でも開催がオンラインで可能になったことは画期的。
- ・例年にも増して優れたスピーカーによる充実した内容だった。
- ・「結束、分権化、信頼できるリーダー」とのプレゼンに感銘を受けた。
- ・開催地が遠隔地ながら同時通訳も行われ、テクノロジーの進歩を実感した。
- ・非常に啓発的かつ刺激的な示唆がいくつもあり、大変参考になった。
- ・スピーカーの裏話やショートコメントに新聞等では得られないヒントがあった。
- ・新しいソフトによるオンライン形式の会議は簡単にアクセス出来、違和感なく聴取した。
- ・世界の頭脳に触れられ、日本という小さな世界が認識できた。物事はグローバルな視点に

立って考えねばならないことなど学んだ。

・二日目の講演は抽象的ではなく具体性に富んでいたためよく理解できた。世界には様々な見方があることが改めて認識できた。

以上